

『維摩經玄疏』 訳注（8）

菅野博史

本訳注は、『維摩經玄疏』 訳注（一）』（『大倉山論集』40、1996.12、235-261）、
『維摩經玄疏』 訳注（二）』（『大倉山論集』43、1999.3、297-316）、『維摩經玄
疏』 訳注（三）』（『多田孝文名誉教授古稀記念論文集 東洋の慈悲と智慧』所収、
32-54、山喜房仏書林、2013.3）、『維摩經玄疏』 訳注（4）』（『創価大学人文論集』
29、2017.3、33-72）、『維摩經玄疏』 訳注（5）』（『創価大学人文論集』30、2018.3、
61-84）、『維摩經玄疏』 訳注（6）』（『創価大学人文論集』31、2019.3、115-148）、
『維摩經玄疏』 訳注（7）』（『創価大学人文論集』32、2020.3、49-73）の続編であ
る。創価大学大学院の授業において、院生と『維摩經玄疏』を一読に読んでい
る。参加者は、大津健一、向江千絵、須藤優、石田和義、海野昌城の五氏である。

参考までに、今回の範囲である『維摩經玄疏』 卷第四～卷第五の科文を下
に示す。科文については、これまで長期にわたる連載において、修正すべき
箇所も見られるので、訳注がすべて終わって、全体をまとめる際に、改めて
科文表を作成することとする。なお、今回の範囲には、テキストの錯簡があ
り、科文表の頁・段・行に前後するところがあるのはそのためである。

なお、今回、山口弘江氏より、氏の学位請求論文の付篇である『維摩經玄
疏』の訳注研究のご提供を受けた。出典の調査などに活用させていただき
たい。これは山口氏が『維摩經玄疏』の訳注研究を完成するようにと、私を激励
する意味を込めたものと受け止め、ここに記して感謝申し上げる。

現在の科文においては、「項」の下の層については、算用数字を用いる。科
文の名称については、テキストの箇所によって若干の表現の相違が見られる

ので、適宜処理する。科文の名称の後の()に、大正蔵卷第38の頁・段・行を挿入する。

翻訳部分に、大正蔵卷第38の頁・段を挿入する。ただし、テキストに錯簡のある箇所には、混乱を避けるために、548cと549aの頁・段の記載は省略する。

注のなかの引用典拠については、CBETAを利用する。ただし、漢字は常用字体を用い、句読点は改める。『大日本統蔵経』については、『新纂大日本統蔵経』を使用し、略号をXとする。

『維摩経玄疏』科文

『維摩経玄疏』卷第四

- 3.5 観心に約して四教を明かす (544a15)
 - 3.51 観心に約して三蔵教を明かす (544a23)
 - 3.52 観心に約して通教を明かす (544b8)
 - 3.53 観心に約して別教を明かす (544b11)
 - 3.54 観心に約して円教を明かす (544b14)
- 3.6 諸経論を通ず (544b20)
 - 3.61 経に対す (544b22)
 - 3.62 論に対す (544c5)
 - 3.621 通じて経を申ぶる論 (544c6)
 - 3.6211 通じて小乗経を申ぶ (544c7)
 - 3.6212 通じて大乘経を申ぶ (544c10)
 - 3.622 別して経を申ぶる論 (544c12)
 - 3.6221 別して小乗経を申ぶ (544c13)
 - 3.6222 別して大乘経を申ぶ (544c16)
- 3.7 四教を用て此の経の文を釈す (544c25)
 - 3.71 室外の四品を通ず (544c27)

- 3.72 室内の六品を通ず (545a13)
- 3.73 出室の四品を通ず (545a22)
- 4. 本迹の義を辨ず (545a29)
 - 4.1 本迹の名を釈す (545b10)
 - 4.2 不思議本迹の義を明かす (545b18)
 - 4.21 理事に約して本迹を明かす (545b21)
 - 4.22 理教に約して本迹を明かす (545b27)
 - 4.23 理行に約して本迹を明かす (545c5)
 - 4.24 体用に約して本迹を明かす (545c13)
 - 4.25 権実に約して本迹を明かす (545c20)
 - 4.3 本迹の高下を辨ず (545c28)
 - 4.4 通じて教に約して本迹を分別す (546b5)
 - 4.5 正しく浄名の本迹を辨ず (546c11)
 - 4.6 観心に約して本迹を辨ず (546c26)
 - 4.7 経を通ず (547a7)
- 第二目 所説を釈す (547a24)

『維摩經玄疏』 卷第五

第二項 通名を釈す (547b25)

- 1. 無翻を明かす (547c2)
- 2. 有翻を明かす (548a2)
- 3. 有翻・無翻を通和す (548b3)
- 4. 法に歴て解釈す (549a2)
- 5. 観心に約す (548b16)
 - 5.1. 無翻に類して、観心に約して経を明かす (548b19)
 - 5.2. 有翻に類して、観心に約して経を明かす (548c6)
 - 5.3. 有翻・無翻を和通するに類して、観心に約して経を明かす (549a23)
 - 5.4. 法に歴るに類して、観心に約して経を明かす (549a28)

【翻訳】

3.5 観心に約して四教を明かす

^{544a}第五に観心に約して四教を明かすとは、三観従り四教を起こすこと、已に前に辨ずるが如し。今、但だ心に即する行用を論ぜば、一切教門は皆な初心の観行従り起こると識る。四教は既に一切の経教を撰す。若し一念の観心分明ならば、能く一念の無明の因縁もて生ずる所の心を分別す。四辯¹は歴然²たれば、則ち一切の経教の大意は、皆な観心に約して通達す。此れに就いて、即ち四意と為す。一に観心に約して三蔵教の相を明かし、二に観心に約して通教の相を明かし、三に観心に約して別教の相を明かし、四に観心に約して円教の相を明かす。

3.51 観心に約して三蔵教を明かす

第一に観心に約して三蔵教の相を明かすとは、即ち是れ一念の因縁もて生ずる所の心の生滅を観じて、析³仮入空す。此の観門に約して、一切の三蔵教を起こすなり。若し生滅の四諦を観じて道に入らば、即ち是れ修多羅蔵なり。故に『増一阿含』に云わく、「仏は諸比丘に告げて謂わく、一切法とは、祇だ是れ一法なるのみ。何等をか一法と為す。心は是れ一法なり。心を離れて、一切法無きなり」⁴と。『智度論』に云わく、「『初転法輪経』従り『大涅槃』に至る

1 辯 底本の「辨」を、『再校維摩経玄義』の「辨は宋には辯に作る」によって「辯」に改める。

2 然 底本の「念」を、『再校維摩経玄義』の「歴念の念は然に作る」によって「然」に改める。

3 析 底本の「折」を、『維摩玄疏籤録』卷四、「折は宋本に析に作る」によって「析」に改める。ちなみに『再校維摩経玄義』には、上欄にこのような書き入れはない。

4 『増一阿含』に云わく、「仏は諸比丘に告げて謂わく、一切法とは、祇だ是れ一法なるのみ。何等をか一法と為す。心は是れ一法なり。心を離れて、一切法無きなり」『維摩玄疏籤録』卷四に、「第四卷。意を取りて引くのみ。此れは心は是れ修多羅なるを証す」とある。たとえば、『増一阿含経』卷第四、護心品、「当修行一法、当広布一法。修行一法、広布一法已、便得神通、諸行寂靜、得沙門果、至泥洹界。云何為一法。所謂無放逸行。云何為無放逸行。所謂護心也。云何護心」(T02, no. 125, p. 563, c12-16)を

まで、修多羅藏を結ぶ⁵と。これは祇だ是れ心の生滅に約して、四聖諦を説く^{544b}。即ち是れ法帰⁶・法本の義なり。

観心もて一切の毘尼藏を出すとは、仏は戒を制する時、諸の比丘に問う。「汝は何れの心もて作すや。若し有心にして作さば、即ち是れ戒を犯す。犯有るが故に、持有るなり。若し無心にして作さば、則ち犯と名づけず。犯の義は成ぜざれば、持を説かざるなり。故に重心⁷なれば、戒を発す。無心なれば、則ち戒を発せず」と。若し心従り阿毘曇藏を出すと言わば、四卷に略説するを、『毘曇心』と名づく⁸。達磨波羅⁹は中に処して説くを、名づけて『雑心』と名づく。此の如きは皆な是れ心に約して毘曇を辨ず。無比法¹⁰とは、諸の心・心数の法を分別す。一切法は比す可からざるなり。

参照。

- 5 『智度論』に云わく、「『初転法輪經』従り『大涅槃』に至るまで、修多羅藏を結ぶ」『大智度論』卷第二、「從転法輪經至大般涅槃、集作四阿含。増一阿含・中阿含・長阿含・相應阿含。是名修妬路法藏」(T25, no. 1509, p. 69, c4-6)を参照。
- 6 法帰 僧肇『長阿含經序』(『出三藏記集』卷第九所収)、「阿含秦言法帰。法帰者、蓋是万善之淵府、総持之林苑。其為典也、淵博弘富、温而弥曠、明宣禍福賢愚之迹、割判真偽異濟之原、歴記古今成敗之数、墟域二儀品物之倫。道無不由、法無不在。譬彼巨海百川所帰。故以法帰為名」(T55, no. 2145, p. 63, b28-c4)を参照。また、「法本」については、『維摩經玄疏』卷第三に、「一修多羅藏者、修多羅、此或言無翻。或言有翻者、亦有多家不同。而多用法本為翻。所謂出世言教之本、故云法本。即是四阿含經也」(T38, no. 1777, p. 532, b20-23)とある。
- 7 重心 「無心」と対になっているので、「有心」とある方が理解しやすい。「重心」は、しっかりと意図を持っていることを指すと思われる。
- 8 四卷に略説するを、『毘曇心』と名づく 『阿毘曇心論』四卷を指す。
- 9 達磨波羅 『雜阿毘曇心論』十一卷の著者で、法救と漢訳される。梵名は Dharmatrāta なので、達磨多羅が適当である。たとえば、『三論玄義』、「千年之間有達磨多羅、以婆沙太博四卷極略、更撰三百五十偈、足四卷合六百偈、名為雜心也」(T45, no. 1852, p. 2, c4-6)を参照。
- 10 無比法 abhidharma の漢訳。『維摩經玄疏』卷第三、「三阿毘曇藏者、阿毘曇、此翻言無比法。聖人智慧分別法義戒定無比、故云無比法」(T38, no. 1777, p. 532, b25-27)を参照。

3.52 観心に約して通教を明かす

第二に観心に約して通教を明かすとは、心、因縁もて生ずる所の一切法を観ずるに、心は空ならば、則ち一切法は空なり。是れ体仮入空と為す。一切の通教の明かす所の行位因果は、皆な此れ従り起こる。

3.53 観心に約して別教を明かす

第三に観心に約して別教を明かすとは、心、因縁もて生ずる所を観ずるに、即ち仮名にして、一切恒沙の仏法を具足し、無明・阿梨耶識に依りて、無量の聖諦を分別す。一切の別教の明かす所の行位因果は、皆な此れ従り起こるなり。

3.54 観心に約して円教を明かす

第四に観心に約して円教を明かすとは、心、因縁もて生ずる所を観ずるに、一切の十法界の法を具足し、積聚する所無く、不縦不横にして、不思議中道二諦の理なり。一切の円教の明かす所の行位因果は、皆な此れ従り起こる。輪王の頂上の明珠の如し¹¹。

是れ則ち四教は皆な一念無明心従り起こる。上来、^{しほ}数しば『華嚴経』を引き、微塵を破して三千大千世界の経巻を出だす¹²の義意は、此に在るを明かすなり。

3.6 諸経論を通ず

第六に四教もて経論を通ずとは、仏は四教を用て、一切の頓・漸の諸経を

11 輪王の頂上の明珠の如し 『法華経』安樂行品、「唯譬中明珠、不以与之」(T09, no. 262, p. 38, c28)を参照。

12 微塵を破して三千大千世界の経巻を出だす 『六十卷華嚴経』卷第三十五、宝王如来性起品、「彼三千大千世界等経巻在一微塵内、一切微塵亦復如是。時有一人出興於世、智慧聡達、具足成就清浄天眼、見此経巻在微塵内、作如是念、云何如此广大経巻在微塵内而不饒益衆生耶。我当勤作方便、破彼微塵、出此経巻、饒益衆生」(同前, no. 278, p. 624, a6-11)を参照。

成ず。諸論は經を積すれば、豈に四教を越えんや。即ち二意と為す。一に經に對し、二に論に對す。

3.61 經に對す

第一に經に對すとは、『華嚴經』の若きは、但だ二教を具して成ずる所なり。一に別教、二に円教なり。所以は何ん。別教は則ち諸菩薩の、歴劫修行して、四十二心に結を断じ、行位に階差ある¹³を宣説す。円教は一心に一切諸行を具足するを明かし、初めの一地从り一切諸地の功德を具足す。次に明かす。漸教の初めの声聞經は、但だ三藏教を具するのみにして、方等大乘、及び此の經は四教を具足し、『摩訶般若』は三教を具足して三藏教を除き、『法華經』は開權顯実して正直に方便を捨つれば、但だ一円教なるのみにして、『涅槃經』^{544c}は四教を具足して五味の義を成ずるなり。

問うて曰う。方等大乘にも亦た四教を具す。何が故に五味の義を成ぜざるや。

答えて曰う。声聞の作仏を明かさざれば、五味の義は成ぜず。不定の中に約して、四教を論ずることを得るなり。釈迦出世の所有る經教は、更に此の四教を過ぎず。此の諸經を撰するに、罄^つきて尽きざること無きなり。

3.62 論に對す

第二に論に對すとは、論に二種有り。一に通じて經を申ぶる論、二に別して經を申ぶる論なり。

3.621 通じて經を申ぶる論

一に通じて經を申ぶる論とは、即ち二意と為す。一に通じて小乘經を申べ、二に通じて大乘經を申ぶ。

13 行位に階差あり 底本の「行位皆差」を、『維摩玄疏籤録』卷四の「皆は、宋本同じ。疑うらくは、誤る。当に階の字に作るべし」によって「行位階差」に改める。

3.6211 通じて小乗経を申ぶ

一に通じて小乗経を申ぶとは、『毘曇』・『成実』・『毘勒』等の論の如きは、並びに是れ通じて小乗の経を申ぶる論なり。故に『成論』の主は云わく、「我れは今、正しく三蔵の中の実義を論ぜんと欲す」¹⁴と。

3.6212 通じて大乘経を申ぶ

二に通じて大乘経を申ぶとは、『地持論』・『撰大乘論』・『唯識論』・『中論』・『十二門論』等の如し。並びに是れ通じて諸大乘経に明かす所の通・別・円、及び三蔵教を申ぶるなり。

3.622 別して経を申ぶる論

二に別して経を申ぶる論とは、即ち二意と為す。一に別して小乗経を申べ、二に別して大乘経を申ぶ。

3.6221 別して小乗経を申ぶ

一に別して小乗経を申ぶとは、『俱舍論』は別して修多羅を申べ、『明了論』は別して毘尼を申べ、『毘婆沙』、諸の『阿毘曇心』は別して¹⁵仏、在世に毘曇を説くを申ぶるが如きなり。

14 『成論』の主は云わく、「我れは今、正しく三蔵の中の実義を論ぜんと欲す」 底本の「成論云我主今」を、『維摩玄疏籤録』、『四教義』によって「成論主云我今」に改める。『維摩玄疏籤録』巻四に、「主の字は、疑うらくは錯置なり。『大本』に論の字の下に在るを是と為す」とある。『成実論』巻第一、具足品、「故我欲正論 三蔵中実義」(T32, no. 1646, p. 239, b2)を参照。なお、『四教義』巻第十二、「成実論主云、我今正欲論三蔵中実義」(T46, no. 1929, p. 768, b5)を参照。

15 別 底本の「明」を、『維摩玄疏籤録』、『四教義』によって「別」に改める。『維摩玄疏籤録』巻四に、「明は、『大本』に別に作る」とある。『四教義』巻第十二、「毘婆娑論・阿毘曇論別申仏在世説毘曇也」(T46, no. 1929, p. 768b11)を参照。

3.6222 別して大乘經を申ぶ

二に別して大乘經を申ぶとは、『十地論』は別して『華嚴經』の別・円の兩教を申べ、『大智度論』は別して『摩訶般若經』の通・別・円の三教を申ぶるが如し。応に別して『大集』、方等、及び此の經を申ぶる論有るべきも、此の土に來たらず。『金剛般若論』は別して『金剛般若經』を申ぶ。『法華論』は別して『法華經』の一の円教を申ぶ。『涅槃論』は別して『涅槃經』の四教・五味を申ぶ。論は此に度ること尽くさず¹⁶。此の如き等の諸論、經を申ぶるは、即ち是れ觀心を申ぶ。此れ等の諸經は、分明ならしむるなり¹⁷。是れ則ち精しく^{くわ}觀心を修し、^{ほが}洞らかに一切の經論を解す。若し經論は心従り出でずば、觀行の人は既に聴かず読まず。何ぞ内心に通達ずることを得んや。此れは乃ち言説する所有れば、冥¹⁸に經論と相應す。意は此に在るなり。

3.7 四教を用て此の經の文を釈す

第七に四教を用て此の經の文を釈すとは、即ち三意と爲す。一に室外の四

16 論は此に度ること尽くさず 龍樹の『涅槃論』と天親の『涅槃論』のうち、両者が中国に伝わっていないという解釈と龍樹の『涅槃論』のみ伝わっていないという二つの解釈があるようであるが、天親の『涅槃論』は現存する(『大正新脩大藏經』第二十六卷所収)ので、後者の解釈を採る。

17 即ち是れ觀心を申ぶ。此れ等の諸經は、分明ならしむるなり 底本の「即是申觀心等諸經令分明也」を、『維摩玄疏籤録』、『四教義』、文意によって「即是申觀心此等諸經令分明也」に改める。『維摩玄疏籤録』卷四に、「等の上に、『大本』に此の字有り。今の文は疑うらくは脱なり。此れは通別に論を申ぶるの意を総結するなり」とある。『四教義』卷第十二、「即是申觀心。此等諸經今分明也」(T46, no. 1929, p. 768b17-18)を参照。また、『四教玄義籤録』卷四に、「今の字は『略玄』に準ずるに、當に令に作るべし。写誤なるのみ」とある。

18 冥 底本の「眞」を、『維摩玄疏籤録』、『四教義』によって「冥」に改める。『維摩玄疏籤録』卷四に、「宋本も亦た同じ。疑うらくは誤りなり。『大本』に冥に作るを是と爲す。眞は置と同じ。此の中の意に非ざるなり」とある。『四教義』卷第十二、「此乃有所言説冥与經論相應」(同前, p. 768b20-21)を参照。

品¹⁹を通じ、二に室内の六品²⁰を通じ、三に出室の四品²¹を通ず。

3.71 室外の四品を通ず

第一に室外の四品を通ずとは、四教に因果を明かすこと同じからず。故に釈迦は仏国を現ずるに異なり有り。身子と螺髻梵王^{らけい}の見るは同じからざるが如し²²。諸天は宝器を共にして食す。其の果報^{545a}に随いて、飯の色に異なり有り²³。正しく四教の不同を稟くるを以ての故に、仏国を見るに異なり有るなり。方便品を釈するに、正しく三藏・通教を用う。所以は何ん。析²⁴法入空、因縁の生滅無常を明かし、復た如夢如幻、体仮入空の意を説く。是れ則ち因の中に拙・巧の二度を用い、其の界内の愛・見の著心を破す。二教の法身を勧修するなり。弟子品は通教・別教・円教を用て²⁵、十大弟子、及び五百羅漢を弾

19 室外の四品 仏国品、方便品、弟子品、菩薩品を指す。

20 室内の六品 文殊師利問疾品、不思議品、観衆生品、仏道品、入不二法門品、香積仏品を指す。

21 出室の四品 菩薩行品、見阿闍仏品、法供養品、嘱累品を指す。

22 身子と螺髻梵王の見るは同じからざるが如し 『維摩経』卷上、仏国品、「爾時螺髻梵王語舍利弗、勿作是意、謂此仏土以為不浄。所以者何。我見釈迦牟尼仏土清浄、譬如自在天宮。舍利弗言、我見此土丘陵坑坎、荊棘沙磧、土石諸山、穢惡充滿。螺髻梵王言、仁者心有高下、不依仏慧、故見此土為不浄耳」(T14, no. 475, p. 538, c12-18)を参照。

23 諸天は宝器を共にして食す。其の果報に随いて、飯の色に異なり有り 『維摩経』卷上、仏国品、「譬如諸天、共宝器食、隨其福德、飯色有異」(同前, p. 538, c27-28)を参照。

24 析 底本の「折」を、『維摩玄疏籤録』によって「析」に改める。『維摩玄疏籤録』卷四、「宋本に亦た誤る。当に析に作るべし」を参照。

25 通教・別教・円教を用て 底本の「通用別教円教」を、『維摩玄疏籤録』によって「用通教別教円教」に改める。『維摩玄疏籤録』卷四に、「通用の二字は、宋本に用通教の三字に作る。『大本』も亦た同じ。今文は錯なり」とある。『四教義』卷第十二、「弟子品用通教別教円教、彈呵十大弟子及五百羅漢」(T46, no. 1929, p. 768c10-11)を参照。

訶す²⁶。通教を用て彈ずとは、迦旃延、三蔵教の拙度の五義²⁷を説くを訶するが如し。別教を用て斥すとは、此れは富樓那、穢食をば宝器に置く²⁸を訶するが如きなり。円教を用て訶すとは、身子・善吉を弾じて、滅定を起たずして諸の威儀を現じ²⁹、癡愛を断ぜずして明脱を起こし³⁰、亦た不縛不解なり³¹と云うが如し。是れ円教の意を用て彈ずるなり。四教もて菩薩品を釈するに、正しく是れ円教を用て四大菩薩³²を訶す。三蔵・通教・別教を用て自行・化他するは偏僻^{へんびやく}にして、不思議円頓の道に乖くなり。

3.72 室内の六品を通ず

第二に室内に四教を用て六品の経文を釈するを明かすとは、大士に三教の疾無けれども、方便を以て三疾に同じきを現ず。此れに約して問疾品を辨するなり。不思議品は正しく円教の不思議の果に住して、四教の事を示現する

26 十大弟子、及び五百羅漢を彈訶す 『維摩經』卷上、弟子品には、十大弟子(舍利弗・目犍連・摩訶迦葉・須菩提・富樓那・迦旃延・阿那律・優波離・羅睺羅・阿難)が次々と維摩詰に彈訶されたことを述懐している。また、「五百羅漢」については、弟子品の末尾には、「如是五百大弟子各各向仏説其本縁、称述維摩詰所言、皆曰、不任詣彼問疾」(T14, no. 475, p. 542, a23-25)とあるのを参照。

27 五義 『維摩經』卷上、弟子品、「迦旃延白仏言、世尊、我不堪任詣彼問疾。所以者何。憶念昔者、仏為諸比丘略説法要、我即於後、敷演其義、謂無常義・苦義・空義・無我義・寂滅義」(同前, p. 541, a12-16)を参照。

28 富樓那、穢食をば宝器に置く 『維摩經』卷上、弟子品、「時維摩詰来謂我言、唯。富樓那、先当入定、觀此人心、然後説法。無以穢食置於宝器、当知是比丘心之所念、無以琉璃同彼水精」(同前, p. 540, c26-28)を参照。

29 滅定を起たずして諸の威儀を現じ 『維摩經』卷上、弟子品、「時維摩詰来謂我言、唯。舍利弗、不心是坐、為宴坐也。夫宴坐者、不於三界現身意、是為宴坐。不起滅定而現諸威儀、是為宴坐」(同前, p. 539, c19-22)を参照。

30 癡愛を断ぜずして明脱を起こし 『維摩經』卷上、弟子品、「若須菩提不断姪怒癡、亦不与俱。不壞於身、而隨一相。不滅癡愛、起於明脱」(同前, p. 540, b23-25)を参照。

31 亦た不縛不解なり 『維摩經』卷上、弟子品、「以五逆相而得解脫、亦不解不縛」(同前, p. 540, b25-26)を参照。

32 四大菩薩 『維摩經』卷上、菩薩品に出る、弥勒菩薩、光嚴童子、持世菩薩、長者子善徳を指す。

を明かすなり。観衆生品は、即ち是れ不思議の通・円の両教の従仮入空・不可得空を辨ずるなり。仏道品は、即ち是れ不思議の別・円の両教の従空入仮、非道を行じて仏道に通達する³³を辨ずるなり。不二法門品は正しく円教の不思議の中道正観、入不二法門品を明かすなり。香積品は、即ち是れ不思議の円教の明かす所の双照二諦、法界円融なり。

3.73 出室の四品を通ず

第三に四教を用て出室の四品の経文を通ずるを明かすとは、菩薩行品は菩薩をして遍く四教の行を行じ、四土にて衆生を化せしむるなり。四教もて見阿闍仏品を通ずとは、若し四教に依り、四行を修し、菩提心を発せば³⁴、始めて阿闍仏国に生ずるを明かすなり。亦た此れを用て、無動如来の仏国の行を成ず³⁵。成仏を得る時、所有る仏国は妙喜世界³⁶の如きなり。四教もて法供養・嘱累品の二品を通ずとは、天帝・弥勒に付嘱し、仏、世を去りて後に於いて

33 非道を行じて仏道に通達する 『維摩経』巻中、仏道品、「若菩薩行於非道、是為通達仏道」(同前, p. 549, a1-2)を参照。

34 四行を修し、菩提心を発せば 底本の「修行発菩提心」を、『維摩玄疏籤録』、『四教義』によって「修四行発菩提心」に改める。『維摩玄疏籤録』巻四、「修の下、『大本』に四の字有り。提は宋本に薩に作るを是と為す」を参照。ただし、「菩提心」を「菩薩心」には改めない。『四教義』巻第十二、「若依四教修四行、発菩提心、始得生阿闍仏国也」(T46, no. 1929, p. 768, c29-p. 769, a1)を参照。ちなみに、「四行」は、四教それぞれの修行を指すと思われる。具体的には、藏教の析空観、通教の体空観、別教の次第三観、円教の一心三観を指す。

35 此れを用て、無動如来の仏国の行を成ず 底本の「用此義無動如来仏国之行」を、『維摩玄疏籤録』、『四教義』によって「因此成無動如来仏国之行」に改める。『維摩玄疏籤録』巻四、「因、疑うらくは誤れり。『大本』に用に作る。此は四の教・行を指す。義の字は誤れり。宋本に成の字に作る」を参照。『四教義』巻第十二、「用此成無動如来仏国之行」(同前, p. 769, a1)を参照。

36 妙喜世界 阿闍仏(無動如来)の浄土の名。『維摩経』巻下、見阿闍仏品、「是時仏告舍利弗、有国名妙喜、仏号無動。是維摩詰於彼国没、而来生此」(T14, no. 475, p. 555, b5-7)を参照。

此の經を流通せしむ³⁷。四教の利益は、未來の弟子をば、絶えざらしむるなり。

4. 本迹の義を辨ず

第四に本迹の義^{54b6}を辨ずとは、既に四教を用て淨無垢稱の義を分別す。義は同じからずと雖も、正しく円教を用て解釈す。夫れ聖人は応を垂るるに、本迹の殊なり無きに^{あら}不ず。或いは金粟の法身³⁸を示し、或いは補處の像を現ず。經説は縁に随い、高下は測り難し。是を以て今、須らく本迹を辨ずべきなり。

今、此の義を明かすに、略して七重有り。第一に名を釈し、第二に本迹を明かし、第三に本迹の高下を辨じ、第四に教に約して本迹を分別し、第五に正しく維摩の本迹を明かし、第六に觀心に約して本迹を明かし、第七に本迹を用て此の經の文を通ず。

4.1 本迹の名を釈す

第一に本迹の名を釈すとは、通じて本迹の名を論ずるに、乃ち四教に遍ず。今、正しく不思議の本迹を明かすとは、正しく円教に就いて以て辨ずるなり。言う所の本迹とは、本は即ち所依の理にして、迹は是れ能依の事なり。事理合して明らかなるが故に、本迹と稱す。譬えば人、住處に依れば、則ち行往の蹤跡有るが如きなり。住處は是れ所依なり。能依の人に、行往の跡有り。處に由りて跡有り、跡を尋ぬれば處を得。今、處を以て所依の理本を譬う。人、行往の跡に依るは、能依の事迹を譬う。是れ則ち所依の理本に由りて、能依の事迹有り。能依の事迹を尋ぬれば、所依の理本を得。本迹は殊なりと雖も、不思議一なり。

37 天帝・弥勒に付嘱し、仏、世を去りて後に於いて此の經を流通せしむ 『維摩經』卷下、囑累品、「於是仏告弥勒菩薩言、弥勒、我今以是無量億阿僧祇劫所集阿耨多羅三藐三菩提法、付嘱於汝。如是輩經、於仏滅後末世之中、汝等當以神力広宣布於閻浮提、無令断絶」(同前, p. 557a7-11) を参照。

38 金粟の法身 『浄名玄論』卷第二、「復有人釈云、浄名・文殊、皆往古如来、現為菩薩。如首楞嚴云、文殊為龍種尊仏。発迹經云、浄名即金粟如来。今明聖迹無方、難可測度」(T38, no. 1780, p. 866, b4-7) を参照。

4.2 不思議本迹の義を明かす

第二に不思議の本迹の義を明かすとは、略して五意と為す。一に理事に約して本迹を明かし、二に理教に約して本迹を明かし、三に理行に約して本迹を明かし、四に体用に約して本迹を明かし、五に権実⁵⁴に約して本迹を明かす。

4.21 理事に約して本迹を明かす

一に理事に約して本迹を明かすとは、此の『経』に云わく、「無住の本従り、一切法を立つ」³⁹と。今、不思議の理事を本迹と為すと明かすは、理は即ち不思議の真諦の理を本と為す。事は即ち不思議の俗諦の事を迹と為す。不思議の真諦の理本に由るが故に、不思議の俗諦の事迹有り。不思議の俗諦の事迹を尋ぬれば、不思議の真諦の理本を得。是れ則ち本迹は殊なりと雖も、不思議一なり。

4.22 理教に約して本迹を明かす

二に理教に約して本迹を明かすとは、此の『経』に云わく、「三たび法輪を大千に転ず。其の輪は本来常に清浄なり」⁴⁰と。今、不思議の理本と言うは、即ち是れ不思議の二諦^{545c}の理事にして、通じて名づけて理と為す。理は即ち本なり。不思議の教迹とは、即ち是れ大聖は八音⁴¹もて不思議の能詮の二諦の教迹を敷演するなり。所詮の不思議の二諦の理は、即ち是れ理本にして、能詮の教は、即ち是れ事迹なり。是れ則ち理本に由るが故に、教迹有り。教迹を尋ねて、以て理本を得。本迹は殊なりと雖も、不思議一なり。

39 此の『経』に云わく、「無住の本従り、一切法を立つ」『維摩経』卷中、観衆生品、「無住則無本。文殊師利、從無住本、立一切法」(T14, no. 475, p. 547, c21-22)を参照。

40 此の『経』に云わく、「三たび法輪を大千に転ず。其の輪は本来常に清浄なり」『維摩経』卷上、仏国品、「三転法輪於大千 其輪本来常清浄 天人得道此為証 三寶於是現世間」(同前, p. 537, c19-20)を参照。

41 八音 仏の八種のすぐれた声のこと。『法界次第初門』卷下之下、「八音初門第五十九。一極好、二柔軟、三和適、四尊慧、五不女、六不誤、七深遠、八不竭」(T46, no. 1925, p. 697, a15-17)を参照。

4.23 理行に約して本迹を明かす

三に理行に約して本迹を明かすとは、『法華經』に云うが如し、「諸法は本従り来、常自に寂滅の相なり。仏子は道を行じ已って、来世に仏と作ることを得」⁴²と。今、不思議の理本を明かすとは、即ち是れ理教なり。故に此の『經』に云わく、「文字を離れて解脫の相を説くこと無く、文字の性離るれば、即ち解脫なり」⁴³と。不思議の行迹とは、即ち是れ不思議の觀行の事迹なり。不思議の理教の理本に由りて、不思議の觀行の事迹を修することを得。觀行の不思議の事迹を修して、能く不思議の理本に契^{かな}う。故に曰わく、「本迹は殊なりと雖も、不思議一なり」と。

4.24 体用に約して本迹を明かす

四に体用に約して本迹を明かすとは、即ち是れ法身を体と為し、応身を用と為す。故に『金光明經』に云わく、「仏の眞の法身は、由^なお虚空の如し。物に応じて形を現わすは、水中の月の如し」⁴⁴と。正しく虚空に実月の本体有るに由るが故に、一切の水月の影の用有り。今、理行合して不思議の法身の理本と為るを明かす。此の法身に由るが故に、能く不思議の応用の迹を垂る。此の応用は能く法身を顕わすに由る。故に肇師、「本に非ざれば、以て迹を垂ること無く、迹に非ざれば、以て本を顕わすこと無し。本迹は殊なりと雖も、

42 『法華經』に云うが如し、「諸法は本従り来、常自に寂滅の相なり。仏子は道を行じ已って、来世に仏と作ることを得」『法華經』方便品、「諸法従本来 常自寂滅相 仏子行道已 来世得作仏」(T09, no. 262, p. 8, b25-26)を参照。

43 此の『經』に云わく、「文字を離れて解脫の相を説くこと無く、文字の性離るれば、即ち解脫なり」『維摩經』卷中、觀衆生品、「無離文字説解脫也。所以者何。一切諸法是解脫相」(T14, no. 475, p. 548, a14-15)、同、卷上、弟子品、「一切言説不離是相。至於智者、不著文字、故無所懼。何以故。文字性離、無有文字。是則解脫。解脫相者、則諸法也」(同前, p. 540, c17-20)を参照。

44 『金光明經』に云わく、「仏の眞の法身は、由^なお虚空の如し。物に応じて形を現わすは、水中の月の如し」『金光明經』卷第二、四天王品、「仏眞法身 猶如虚空 応物現形 如水中月 無有障礙」(T16, no. 663, p. 344, b3-5)を参照。

不思議一なり」と云う⁴⁵は、即ち其の義なり。

4.25 権実に約して本迹を明かす

五に権実に約して本迹を明かすとは、実は則ち位に^{かさ}齊りて、真・応の二身を証得す。即ち是れ理実の本なり。権化の方便は、真・応の二身を現ず。或いは高く或いは^{ひく}下し。此れは即ち是れ事は物の情に随うが故に、事迹と名づくるなり。故に此の『経』に云わく、「復た成道を示現し転法輪を起こすと雖も、菩薩行を捨てず」⁴⁶と。今明かす、若し不思議の位に由りて真・応の二身を証せずば、理実の本は、豈に能く高下の真・応の両迹を垂れんや。若し真・応の事迹を垂れずば、豈に能く物をして同じく已に位に入り、真・応の二身を得しめんや。是れ則ち本迹は殊なりと雖も、不思議一なり。

4.3 本迹の高下を辨ず

第三に本迹の高下を辨ずとは、正しく円教に約して以て明かすなり。若し理事に本迹を明かさば、即ち是れ理即なり。若し理教に約して本迹を明かさ^{546a}ば、即ち是れ名字即なり。若し理行に約して本迹を明かさば、正しく是れ観行即・相似即なり。

今、体用・権実に約して本迹を明かす。応に須らく四句もて分別すべし。一に本迹俱下、二に本下迹高、三に本高迹下、四に本迹俱高なり。

今、此の義は復た須らく四種に分別すべしと明かす。一に十信を明かす。此の四句に約して以て高下を明かすことを得ざるなり。二に十住を明かす。初発心住は二句を備う。三に第二の治地住従り第四十一の等覺地に至るまで

45 肇師、「本に非ざれば、以て迹を垂るること無く、迹に非ざれば、以て本を顕わすこと無し。本迹は殊なりと雖も、不思議一なり」と云う 僧肇「維摩詰経序」(『出三藏記集』卷第八所収)、「非本無以垂迹、非迹無以顯本、本迹雖殊、而不思議一也。」(T55, no. 2145, p. 58, b5-6)を参照。

46 此の『経』に云わく、「復た成道を示現し転法輪を起こすと雖も、菩薩行を捨てず」『維摩経』卷中、文殊師利問疾品、「雖得仏道転于法輸入於涅槃、而不捨於菩薩之道、是菩薩行」(T14, no. 475, p. 545, c28-29)を参照。

は皆な四句分別を具す。四に妙覺地は但だ二句を用て分別するのみ。

一に初めの十信は四句を用て分別することを得ずと明かすとは、十信の似解は、未だ真無漏を發し、真・応の二身を躰わさざるを以ての故に、四句を用て其の高下を判ずることを得ざるなり。

二に十住の初心、初發心住は但だ二句を用て分別するを明かすとは、初住は但だ本迹俱下・本下迹高の二句有るなり。所以は何ん。初住の最初に真・応の二身を得。法身の本は、爾前に既に未だ法身の下き有らず。故に位に斉りて法身に高有りと言うことを得ざるなり。譬えば十五日の月、初日の月の如し。爾前に月の勝る可き無きなり。亦た声聞法の中の苦忍真明の如し。爾前に真の勝る可き無きなり。迹下とは、九法界の迹を現じて、^ま還た初住の応迹を現ずるに、始めて最下を得。爾前に応の高かる可き無きなり。言う所の本下迹高とは、能迹は上地の形声を現ずるなり。而して本高迹下と言うことを得ざるは、爾前に本の高かる可き無きなり。亦た本迹俱高と言うことを得ざるは、爾前に真・応の高かるべき無きなり。

三に第二の治地住従り第四十一の等覺地に至る、此の四十一位は、一一に皆な四句を用て分別することを得るを明かす。義推して知る可きなり。

四に妙覺の極地は但だ二句を用て分別するを明かすとは、一に本迹俱高は、即ち是れ真・応の極は、最上無過なり。二に本高迹下は、本高は即ち是れ真身の極にして、最上無過なり。迹下は下の四十一地の像に応同す。又た、九道の形声を示現するなり。而して本下迹高と言うことを得ざるは、妙覺法身の本は更に勝地法身の下かる可き無きなり。亦た本迹俱下と言うことを得ざるは、更に上地の真・応の二身の高き無きなり。譬えば^{546b}十五日の月の光明円満なるが如し。此れを過ぎて更に円満の光、十五日の月を過ぐる可き無きなり。

問うて曰う。若し四十二地の本迹の階降此の如くば、何ぞ俱に不思議一と稱することを得んや。

答えて曰う。皆な是れ非真非応の不思議の真・応の二身なり。非階降の不思議の階降なり。

4.4 通じて教に約して本迹を分別す

第四に通じて教に約して本迹を分別すとは、即ち四意と為す。一に円教に約して本迹を分別し、二に別教に約して本迹を分別し、三に通教に約して本迹を分別し、四に三藏教に約して本迹を分別す。

一に円教に約して本迹を分別すとは、前の釈名に本迹の五義⁴⁷を辨じて、高下の四句分別を明かすが如きなり。

二に別教に約して本迹を明かすとは、亦た備^{つぶ}さに四種の本迹を用うることを得。円教に類して知る可し。但だ全くは用うることを得ず。即ち是れ地前の三十心は、未だ法身を得ざるが故に、本迹無し。但だ初地に二句を明かして本迹を辨ず。前の円教に類して、初住は知る可し。二地従り等覺に至るまでは、皆な四句もて分別することを得。義推して解す可し。後の妙覺の極地は、亦た但だ兩句を用う。円教の妙覺に類して知る可し。此れは皆な有教無人にして、悉ごとく是れ円教の權迹なり。

三に通教に約して本迹を明かすとは、通教に四種の本迹を明かすことを得。既に中道仏性を辨ぜざれば、真・応の二身は、豈に本迹の分別す可き有らん。但だ還た通の義に約して往釈せば、偏真を見るに、五分法身を具するを本と為し、神通變現を迹と為す。若し無余涅槃に入り、身智は俱に滅せば、但だ迹無きのみならず、亦復た本無し。通教の菩薩は、七地に方便道を具し、八地に道觀双流す。豈に中道仏性の理を知らざるや。但だ教門に約して異⁴⁸を抑うるが故に、真・応を明かさざるのみ。恐らくは此れは多く是れ有教無人にして、悉ごとく是れ円教の權迹なり。若し別^{もつ}を將て通を接せば、仏性、常住涅槃を明かす。真・応の二身、本迹の四句は、前に類して分別すれば、則ち知る可きなり。

47 本迹の五義 『維摩經玄疏』卷第四、「第二明不思議本迹義者、略為五意。一約理事明本迹、二約理教明本迹、三約理行明本迹、四約体用明本迹、五約權實明本迹」(T38, no. 1777, p. 545, b18-21)を指す。

48 異 底本の「畢」を、『維摩玄疏籤録』によって「異」に改める。『維摩玄疏籤録』卷四、「畢は疑うらくは誤れり。当に異に作るべし」を参照。

四に三蔵教に約⁴⁹して本迹を明かすとは、亦た四種の本迹を用うることを得。意も亦た真・応の本迹を明かすことを得ず。猶お是れ生死の人、若し果地に至らば、三十四心に断結成仏を得る時、亦た五分法身を以て本と為し、神通變化を迹と為す。若し無余涅槃に入らば、則ち本迹は俱に滅す。今更に三蔵の因の中に就いて本迹を明かすとは、若し三阿僧祇に惑を伏し、純熟^{546c}して煖・頂・忍の位に住せば、以て本と為し、神通變現を得て、天人・六道を利益するを、名づけて迹と為す。下に此の事有る容^べし。亦た恐らくは有教無人にして、悉ごとく是れ円教の権迹なり。

問うて曰う。一切の聖・凡は悉ごとく本迹を明かすことを得るや。

答えて曰う。本迹の義は、正しく真・応に約す。有余の諸教は既に無明を破するを明かさざれば、尚お此の義すら無し。何に況んや凡夫をや。但だ通じて論を為さば、別教の三十心、及び通教の菩薩は、既に本迹を論ずることを得ば、二乗も亦た本迹を得。三蔵の菩薩は、惑を伏して未だ断ぜざれば、尚お本迹を論ずることを得。凡夫も亦た本迹を論ずることを得。是の故に上は苦忍・世第一法已下に齊しく、下は阿鼻已上に極む。上下の両處は、但だ二句の本迹と為すことを得るのみ。二句を闕く。其の間は例して四句を作す。本迹を論ずるは、義推して知る可きなり。

4.5 正しく浄名の本迹を辨ず

第五に正しく浄名の本迹を辨ずとは、旧に云わく、「本は是れ金粟如来、迹は妙喜に居して無動の補處と為る」と。或いは云わく、「本は是れ八地、迹は毘耶に現じ、位は長者に居す」と。若し此の意に執して、定んで其の本迹を判ぜば、金粟は是れ何れの位の仏と為すや。妙喜の補處は復た是れ何れの位の補處なるや。若し実は是れ妙覺の金粟、迹は妙喜の補處と為らば、此れは是れ本高迹下なる可し。若し本は是れ初住^もの金粟、現じて十地の補處と為らば、此れは是れ本下迹高なり。若是し妙覺の金粟法身は又た応じて妙覺の金粟と

49 約 底本の「明」を、『維摩玄疏籤録』によって「約」に改める。『維摩玄疏籤録』巻四、「明は疑うらくは当に約に作るべし」を参照。なお、底本の脚注にも同様の指摘がある。

為らば、是れ本迹俱高と為す。若是し初住の金粟は応じて三蔵の補処と為らば、是れ本迹俱下と為す。豈に定んで其の優劣高下の位を判ぜんや。大聖は無方の化を以う。豈に是れ凡夫は測量して深淺を判ぜんや。凡夫は尚お自ら己れの業行果報すら識らず。何に況んや其の本迹の類を知らんや。目無く月を指し、其の方円を判ずるが若し。今但だ仰⁵⁰信するのみ。本迹は殊なりと雖も、不思議一なり。而して文殊は既に是れ釈迦の左面の侍者なり。此の土の位行は最も高し。功を推して称歎す。教迹は宜しく八地に在るべからざるなり。

4.6 観心に約して本迹を辨ず

第六に観心に約して本迹を辨ずとは、人、中道の円観^{しやうげん}を学して心原を観ずるが如し。観道は純熟して、迹の中に亦た現じて、障闕有ること無し。円かに行じ円かに説いて、事理相応す。此れは是れ本迹俱高なり。若し内心に円かに学して迹に偏邪を示さば、是れ本高迹下と為す。若し内心に実^{547a}に円観を学せずして無関^{むげん}の相を現ぜば、此れは是れ本下迹高なり。若し本心^{ほんしん}に止だ入空を修して、迹に仮を破するの相を現ぜば、即ち是れ本迹俱下なり。即ち此れを用て仏法の学問、坐禅の一切の行人の心行の高下、自行・化他の得失に約さば、具さに四句分別を作す。一に本迹俱高は、即ち是れ実行⁵¹の人なり。二に本高迹下は、是れ密⁵²行の人なり。三に本下迹高は、即ち是れ貢高の人なり。仏法の為めに衆生を利益するを除く。四に本迹俱下は、亦た是れ実行の人なり。

50 仰 底本の「抑」を、『維摩玄疏籤録』によって「仰」に改める。『維摩玄疏籤録』巻四、「抑は誤れり。宋本に仰に作る」を参照。

51 実行 本地を隠して、衆生救済のために仮りに現われた姿を権というのに対して、外相・内実ともに一致している凡夫のことと思われる。ここでは、本と迹がともに高い、本と迹がともに低いの場合を実行といっている。

52 密 底本の「蜜」を、『維摩玄疏籤録』によって「密」に改める。『維摩玄疏籤録』巻四、「蜜は、宋本に密に作る」を参照。

4.7 経を通ず

第七に経を通ずとは、但だ浄名の本迹は、既に不可思議なるが故に、能く円智の談を以て偏空の道を斥し、無方の辯⁵³を以て有量の心を屈す。皆な本迹の事を顕わす。今明かす。本迹もて此の経文を通ずとは、即ち三意と為す。一に室外を通じ、二に入室を通じ、三に出室を通ず。

一に室外を通ずとは、室外に長者の形を現じ、四教に寄せて以て本迹を顕わす。或いは三蔵・通教の本迹の入空を用て、国王長者を開化す。或いは通・別・円の本迹の教を用て、十大弟子・五百羅漢を折挫す。或いは但だ円教のみを用て、本を顕わし、三教を棄くる菩薩等を弾呵す。

二に室内を通ずとは、室内に疾に託して教を興す。病行を示して、一切衆生の実病に同ず。衆生の疾には、多塗有りと雖も、其の正意を論ずれば、四種を出でず。今、四種の迹の病行を以て、四種の実病に同ず。即ち是れ病行の迹を現ずるを問疾品と為すなり。次下の五品は皆な此の品従り出ず。若し問疾品を通ぜば、下の五品は皆な自ら通ずるなり。

三に出室を通ずとは、大衆を掌撃^{しょうきょう}して菴羅⁵⁴に來入す。病の愈ゆる相を示し、以て衆生の四種の病因は滅す。浄名の権迹の病も亦た愈ゆ。是れ則ち此の『経』は始め従り末に至るまで、本迹の義を用う。

往きて玄義、及び文意を通じて、見る可きなり。

第二目 所説を釈す

第二に次に所説を釈すとは、浄名は是れ能説の人、所説は是れ不思議解脱の法なり。故に所説と言う。他は釈す。浄名は仏法を説き、自法を説かず。若し自法を説かば、則ち仏と行道の法を抗う^{あらが}。今解す。祇だ浄名は自ら其の身

53 辯 底本の「辨」を、『維摩玄疏籤録』によって「辯」に改める。『維摩玄疏籤録』巻四、「辨は、宋本に辯に作る」を参照。

54 菴羅 『維摩経』の説法場所の菴羅樹園のこと。菴羅は、āmraの音写語。『維摩経』巻上、仏国品、「如是我聞。一時仏在毘耶離菴羅樹園、与大比丘衆八千人俱」(T14, no. 475, p. 537, a7-8)を参照。

に証する所の性浄・無垢・方便の三浄の法を説くのみ。此の法は不可説なりと雖も、四悉檀を以て縁に赴いて説く。仏も亦た不可説において、四悉檀を以て縁に赴いて、此の三浄の法を説く。^{547b}浄名は仏の転法輪に随いて、亦た三浄の法を説く。浄名、三浄の法を説くは、即ち是れ仏の三浄の法を説く。故に此の『経』に云わく、「身の実相を觀ず。仏を觀ずるも亦た然り」⁵⁵と。復た次に浄名は自法を説く。但だ即ち是れ仏法を説くのみに非ず、亦た即ち是れ一切衆生の法を説くなり。故に下の文に云わく、「衆生、賢聖、弥勒、一切法は、一如にして二如無きなり」⁵⁶と。『華嚴経』に云わく、「心・仏、及び衆生の是の三に差別無し」⁵⁷と。今、但だ浄名の法を説くは、即ち是れ仏法を説く。亦た即ち衆生法を説くなり。下の文の三十二菩薩は各おの其の得る所の法を説いて、以て不二法門に入るを明かすが如し。例せば五百の比丘は各おの身因を説くが如し⁵⁸。『華嚴経』の善財は法界に入り、善知識に見え、各おの其の得る所の法門を説く⁵⁹。浄名は自らの法門を説く。即ち是れ仏法を説き、即ち是れ

55 此の『経』に云わく、「身の実相を觀ず。仏を觀ずるも亦た然り」『維摩経』卷下、見阿闍梨品、「如自觀身実相、觀仏亦然」(T14, no. 475, p. 554, c29-p. 555, a1)を参照。

56 下の文に云わく、「衆生、賢聖、弥勒、一切法は、一如にして二如無きなり」『維摩経』卷上、菩薩品、「一切衆生皆如也。一切法亦如也。衆聖賢亦如也。至於弥勒亦如也」(同前, p. 542, b12-13)を参照。

57 『華嚴経』に云わく、「心・仏、及び衆生の是の三に差別無し」『六十卷華嚴経』卷第十、夜摩天宮菩薩説偈品、「心如工画師 画種種五陰 一切世界中 無法而不造 如心仏亦爾 如仏衆生然 心仏及衆生 是三無差別」(T09, no. 278, p. 465, c26-29)を参照。

58 例せば五百の比丘は各おの身因を説くが如し 『南本涅槃経』卷第三十二、迦葉菩薩品、「如五百比丘問舍利弗。大徳、仏説身因、何者是耶。舍利弗言、諸大徳、汝等亦各得正解脱。自応識之。何縁方作如是問耶。有比丘言、大徳、我未獲得正解脱時、意謂無明即是身因。作是觀時、得阿羅漢果。復有説言、大徳、我未獲得正解脱時、謂愛無明即是身因。作是觀時、得阿羅漢果。或有説言、行・識・名色・六入・触・受・愛・取・有・生・飲食・五欲即是身因。爾時五百比丘各自説已所解已、共往仏所、稽首仏足、右遶三匝。礼拝畢已、却坐一面。各以如上已所解義、向仏説之。舍利弗白仏言、世尊、如是諸人誰是正説、誰不正説。仏告舍利弗、善哉、善哉。一一比丘無非正説」(T12, no. 375, p. 820, b4-17)を参照。

59 『華嚴経』の善財は法界に入り、善知識に見え、各おの其の得る所の法門を説く

衆生法を説く。

問うて曰う。浄名は自ら己が法を説く。何ぞ經と稱することを得んや。

答えて曰う。『大智論』に、「若しは仏弟子、化人、諸天、仙人の説く所を、仏の所印と爲し、皆な稱して經と爲す」と云うが如し⁶⁰。此の『經』に、仏は宝積の爲めに宗を開き、仏国の因果を辨じ、諸弟子に命じて、皆な往日、大士の訶する所と爲るを述ぶ。仏は黙して之れを印す。又た室に入りて道を論ず。大衆を掌撃して、菴羅園に還り、仏の印定を被る。故に稱して經と爲すなり。

維摩經玄疏卷第四。

維摩經玄疏卷第五

天台山修禪寺沙門智顛撰す

第二項 通名を積す

第一に名を積す。前に已に開いて二重と爲す。一に此の經の別名を積すること已に竟わる。二に次に通名を積す。

第二に正しく通名を積すとは、即ち是れ經の一字を積するなり。若し天竺の語に依らば、仏の教えの首に、通じて修多羅^{はじめ}と標す。或いは修單羅と云い、或いは修妬路と云う。例せば此の土の楚夏の方言の如し。修多羅とは、既に是れ外國の語なれば、古今の諸師の解釈に異なり有り。或いは無翻と云い、或いは有翻^{547c}と云う。今、此の義を積するに、略して五意と爲す。第一に無翻を

「善財」は、善財童子のこと。「法界に入り」は、『華嚴經』入法界品を指す。善財童子が文殊菩薩に出会って發心し、多数の善知識(『六十卷華嚴經』では、文殊師利菩薩を加えて四十五人)を訪問し、最後に普賢菩薩に出会って、法界に証入することを説く。

60 『大智論』に、「若しは仏弟子、化人、諸天、仙人の説く所を、仏の所印と爲し、皆な稱して經と爲す」と云うが如し 『大智度論』卷第二、「何者は仏法。仏法有五種人説。一者仏自口説、二者仏弟子説、三者仙人説、四者諸天説、五者化人説」(T25, no. 1509, p. 66, b4-6)を参照。

明かし、第二に有翻を明かし、第三に有翻と無翻を通和し、第四に法に歴て解釈し、第五に観心に約す。

1. 無翻を明かす

第一に修多羅を無翻と言うを釈すとは、但だ外国に多含の語有り。即ち是れ修多羅の名に五義を含む。豈に但だ経の字を用て往きて翻ず可けんや。故に開善法師の云わく、「経は正翻に非ず。但だ経の字を以て、修多羅に代うるのみなり。此の方の如きに至りては、周孔⁶¹の聖教は、之れを称して経と為す。外国の聖教は、此の土にては宜しく経の字を用て代うるべきなり」と。言う所の修多羅の名に五義を含むとは、一に法本、二微発、三に涌泉、四に繩墨、五に結鬘なり。

一に修多羅の名に法本の義を含むとは、大聖は、一切は皆な不可説なりと知る。四悉檀の因縁を以て言教有る者なり。若し世界悉檀もて説かば、即ち一切の論の本と為す。若し為人・対治の両悉檀もて説かば、即ち行の本と為す。若し第一義悉檀もて説かば、即ち理の本と為す。故に修多羅に法本の義を含むなり。

二に修多羅の名に微発の義を含むを明かすとは、法王は四悉檀を用て教を起こし、巧妙なる玄辞もて、微従り著に至り、詮ぜざる所靡^なし。是れ則ち文義は漸く顕われ、初心を開発す。初・中・後の善は、円満具足す。故に修多羅に微発の義を含むなり。

三に修多羅に涌泉の義を含むを明かすとは、此れは譬えに従いて以て義を明かす。泉は涌流して滔滔として竭^つくること無きが如し。仏は四悉檀を用て説法し、文義は尽くること無く、法流は絶えず。津は潤い萌芽し、三草両木は、一地の生ずる所にして、皆な増長することを得。故に修多羅に、涌泉の義を含むなり。

四に修多羅に繩墨の義を含むとは、亦た是れ譬えに従いて以て義を顕わす。

61 周孔 周公旦と孔子を指す。

世の繩墨は能く邪を裁^き62り正に就くが如し。仏は四悉檀を用て説法し、愛論・見論の邪曲を栽り、真見無漏の正道を発せしむ。故に修多羅に繩墨の義を含むなり。

五に修多羅に結鬘の義を含むとは、此れも亦た譬えに従いて以て義を顕わす。結鬘は、即ち是れ縷は華を穿ち、零落有ること無し。大覺世尊は、四悉檀を以て説法し、諸法の相を詮ず。縁に赴いて皆な漏失無し。又た、結鬘は能く身首を嚴飾す。如来の言教は、行人を莊嚴し、一切は敬愛す。故に修多羅に結鬘の義を含むなり。

此の土に既に此の五義の言を含むこと無し。故に經の字を用て代うるなり。問うて曰う。修多羅に、多く五義を含む。同じく悉檀を用て、往きて^{548a} 積するに、何の五義の別有らんや。

答えて曰う。悉檀の大意は同じと雖も、五義の別は、未だ嘗て混濫せざるなり。

2. 有翻を明かす

第二に修多羅の有翻を明かすとは、有る師の言わく、昔、仏の法は初めて度り、胡漢の語は未だ通ぜず。故に河西の群學は、無翻と謂うなり。爾來、經論は此に度り、胡漢の語を翻譯す。既に修多羅を通ずれば、定めて有翻なり。但だ諸の法師は、各おの伝聞に異なる。

有翻と言うとは、又た一に非ざるを成ず。今、略して五翻の不同を出だす。一に有る師は云わく、「法本なり」と。二に有る師は云わく、「此に翻じて契と云う」と。三に有る師は言わく、「此に翻じて^{せん} 緘と言う」と。四に有る師は翻じて云わく、「善語教なり」と。五に有る師は言わく、「此に翻じて經と云う」と。

一に有る師は、「修多羅、此には翻じて法本と云う」と言うとは、法本に三有り。一に論の本と為し、二に行の本と為し、三に義の本と為す。仏は四悉檀を用て説法して、此の三の本と為すことを得。具さに前に積するが如し。

62 栽 底本の「栽」を、『再校維摩經玄義』によって「裁」に改める。

二に有る師は、「修多羅は、此に翻じて契と言う」と言う。契会^{かいえ}を以て義と為す。世尊は法相の如く解し、四悉檀を用て、法相の如く説く。世界悉檀もて説法するは、即ち是れ情に契^{かな}う。為人・対治の両悉檀もて説法するは、即ち是れ行に契う。第一義悉檀もて説法するは、即ち理に契うなり。

三に有る師は翻じて縫^{ぬい}と言うとは、此れは是れ譬えに因りて義を顕わす。即ち前の結鬘の義と同じきなり。又た、縫^{ぬい}と言うは、縫成を以て能と為す。即ち是れ悉檀の説は、能く三乗の行人の三義⁶³を成ずるなり。

四に有る師は翻じて善語教と云うとは、大聖は大慈心もて理に順じて説法す。故に善語と言う。悉檀を用て機に赴き物を化し、情に順じて行人の入理を成ず。故に善語教と云うなり。

五に有る師は、「経の字は、即ち是れ正翻なり」と言う。所以は何ん。彼の方には極聖の説教するを、修多羅と名づく。此の土には、聖人の説く所を、之れを名づけて経と為す。此れを以て類通するは、即ち正翻なり。言う所の経とは、経由を義と為す。聖人の心口を経由するが故に、称して経と為す。悉檀は教を致し、如来の心口を経由するが故に、経と名づくるなり。又た云わく、「前聖後聖は、此の悉檀の説く所の教を経て成道することを得ざる莫し」と。又た云わく、「経とは、法と訓じ常と訓ず」と。法は軌^{のつと}る可きを云う。常は則ち改変す可きこと難し。悉檀もて教を設く。此の教は能く三利⁶⁴を成ず。必ず定んで軌^{のつと}る可し。故に法と訓ずと云うなり。悉檀もて教を致す。若しは天、若しは魔、若しは梵、若しは諸の沙門、及び婆羅門、乃至余の衆^{548b}は、能く改易すること無し。故に常と云うなり。

問うて曰う。有翻は既に五種不同なれば、豈に類して三義を用て解釈することを得ん。

答えて曰う。彼れを述べて此れを顕わす。彼の義は既に此の意を申ぶれば、又た顕わすに、何の過^{とが}有るや。

63 三義 教、行、理の三種の義をいう。

64 三利 教、行、理の三種の利をいう。

3. 有翻・無翻を通和す

第三に無翻・有翻を和通す。有翻の者は、無翻⁶⁵の者に問いて曰う。何が故に外国に多含の語有りて、此の土に多含の語有ること無しと言うや。此⁶⁶の方の字は、一字を訓ずるに、或いは二訓、乃至多訓なり。此れは即ち是れ多含の義は、正しく經の字の如し。五義を含むを作して解釈せんと欲すれば、其の意は冷然⁶⁷たり。故に知んぬ、無翻の義は非なり。

又た、無翻の者は、有翻の者に問うて曰う。若し昔、両国の言は未だ通ぜざるが故に無翻と云うと言わば、今、両国の語は既に通ずれば、有翻と定むとは、修多羅は但だ是れ外国の一言なるのみ。今、何ぞ翻ずる者不同にして、五語は各おの異なることを得んや。若し一翻を是と為さば、余の四は則ち非なり。孰れか是、孰れか非ならん。若し五翻は俱に是ならば、彼れは一、此れは五なり。一を五と為す可からず、五を一と為す可からず。此れを大いに妨ぐと為す。若し五語は俱に非ならば、定んで無翻と知る。設い更に異翻を出だすとも、皆な用う可からず。今謂う。若し仏法の正意を得ずば、有翻・無翻は、俱に是れ執滞なり。其の意を得る者は、無翻・有翻は、皆な従う可きなり。所以は何ん。若し悉檀もて教を起こすことは是れ一なりと知らば、無翻・有翻

65 翻 底本にはないが、『維摩玄疏籤録』によって補う。『維摩玄疏籤録』巻五、「此の文(問有翻者曰一菅野注)に準ずるに、前の『問無者曰』の『無』の字の下、『翻』字を脱するなり」を参照。

66 此 「此」の下に、テキストの錯簡があることを、『維摩玄疏籤録』、『再校維摩經玄義』が指摘している。『維摩玄疏籤録』巻五に、「正保刻本、此処大有錯簡。予嘗質之幻庵、取決大和尚几下。從今改刻、方得訂正。事如別録。読者略応知焉」とある。大島啓禎『維摩經玄疏』をめぐる二、三の問題(『印度学仏教学研究』28-1、1979年12月、174-175頁)にも、この指摘がある。具体的には、『再校維摩經玄義』によって「此土無有多含之語此」(548b5)の下に、「方字訓一字……三塵不得」(548c11～549a18)の部分を移動する。なお、山口弘江『『維摩經玄疏』訳注研究(Ⅰ)』(金剛大学校『仏教学研究レビュー』5、2009年6月、147-182頁)の注12によれば、大島啓禎氏よりも早く、中国の周叔迦(1899-1970)がすでに『釋典叢録』(『周叔迦佛學論著集』下[北京、中華書局、1991年第1版]、977頁)において、この錯簡を指摘しているそうである。

67 冷然 「冷」は「聆」に通じる。理解するさまをいう。

は、皆な三義⁶⁸を具し、一切の仏法を含む。執諍は既に息むれば、正義は円かに通ず。此れに何れの過有らん。故に『経』に云わく、「義に依りて、語に依らざるなり」⁶⁹と。然りと雖も、今解釈するに、直ちに経の字を用うれば、則ち該^かねざる所無し。又た、無翻・有翻は、幸いに縦容たるを得。所以は何ん。無翻と言うとは、亦た経の字を用て題を標す。有翻と言うとは、亦た経の字を以て題を標す。並びに法本・契・緹・善語教を用て教首に標するを見ざるなり。若し経の字を存せば、是れ則ち有翻・無翻は、両情皆な愜^{かな}う。即ち是れ二家の執諍の義を通和するなり。旧、涅槃を解するに、或いは有翻・無翻と言ひ、般若は或いは有翻・無翻と言う。若し深く此の意を解せば、滞る所無きなり。

4. 法に歴て解釈す

第四に諸法に歴て経を明かすとは、有る師は言わく、「三種の経有り。一に声経、二に色経、三に法経なり」と。

一に声経を明かすとは、大覚世尊は、声もて能く理を詮ず。声を聞いて理を得。故に声は即ち是れ経なり。故に『大品経』に云わく、「若し善知識の処に従わば、般若を聞くなり」⁷⁰と。

二に色経を明かすとは、墨色の字を経と為すなり。墨色を字と為して、能く理を詮ず。色を見て理を得。色は即ち是れ経なり。故に『大品経』に云わく、「若しは経巻中従り般若を聞くなり」⁷¹と。

68 三義 教、行、理の三種の義をいう。

69 『経』に云わく、「義に依りて、語に依らざるなり」『維摩経』卷下、法供養品、「依於義、不依語。依於智、不依識。依於義経、不依不了義経。依於法、不依人」(T14, no. 475, p. 556, c9-10)を参照。

70 『大品経』に云わく、「若し善知識の処に従わば、般若を聞くなり」『大品般若経』卷第二十七、常啼品、「善男子、汝若如是行、不久当聞般若波羅蜜。若從経巻中間、若從菩薩所説聞。善男子、汝所從聞是般若波羅蜜処、応生心如仏想。善男子、汝当知恩、応作是念。所從聞是般若波羅蜜者、即是我善知識。我用聞是法故、疾得不退転於阿耨多羅三藐三菩提。親近諸仏、常生有仏国土中、遠離衆難、得具足無難処」(T08, no. 223, p. 416, b17-25)を参照。

71 『大品経』に云わく、「若しは経巻中従り般若を聞くなり」前注70を参照。

三に法を経と為すとは、法は是れ法塵なり。心と法と合して、内心に思惟して、法を修習す。法に因りて理を見る。法は即ち是れ経なり。故に『経』に云わく、「我が法を修する者は、証して乃ち自ら知る」⁷²と。心に実行無し。何ぞ問いを用いんや。

問うて曰う。六塵は、何の意もて三塵は是れ経にして、香・味・触の三塵は経に非ざるや。

答えて曰う。此の土の三根は鈍なるが故に、香・味・触の理を得ること能わず。故に三塵は経と名づけざるなり。若し他方の仏土ならば、或いは香を以て仏事を為し、或いは味を以て仏事を為し、或いは触もて仏事を為す。此れは則ち三塵は皆な是れ経なり。此の『経』の文に、具さに他方の国土の仏事の不同を出すが如し⁷³。則ち一切法は皆な能く理を詮ずれば、悉ごとく是れ経なり。

問うて曰う。若し此の土の三根は鈍なるが故に、三塵は是れ経なることを得ずと言わば、『法華』に六根清浄を明かす⁷⁴。何ぞ悉ごとく六塵・十法界の理を知ることを得んや。

答えて曰う。此れは是れ『法華』を受持し、六千の功⁷⁵徳は、行人を莊嚴し、六根清浄なり。相似の蔵識の用を顕わせば、則ち六塵・一切法は、皆な是れ経なり。

問うて曰う。一切法は、何ぞ悉ごとく能く理を詮じ、並びに是れ経なることを得んや。

72 『経』に云わく、「我が法を修する者は、証して乃ち自ら知る」 『成実論』卷第一、衆法品、「復次仏法可自証知。不可以己所証伝与他人。如財物等。如婆羅延経中、仏言、我不能自断汝疑。能証我法、汝疑自断」(T32, no. 1646, p. 244, b8-10)を参照。

73 此の『経』の文に、具さに他方の国土の仏事の不同を出すが如し 『維摩経』卷下、菩薩行品、「或有仏土以仏光明而作仏事……諸仏威儀進止、諸所施為、無非仏事」(T14, no. 475, p. 553, c17-28)を参照。

74 『法華』に六根清浄を明かす 『法華経』法師功德品に、如来の寿命長遠を信じる功德として、六根清浄が説かれる。

75 功 底本の「切」を、『再校維摩経玄義』によって「功」に改める。

答えて曰う。是の事は明かし易し。世間の現見は、祇だ是れ一の墨色点じて字を作る。一切法を詮ずること、周からざる所靡し。香・味・触等は、何ぞ然らざることを得ん。故に此の『經』に云わく、「食に於いて等しければ、諸法も亦た等し。諸法等しければ、食に於いても亦た等し」⁷⁶と。故に「能く一食を以て一切に施す」⁷⁷と。『大品經』に云わく、「諸法等しきが故に、般若波羅密も等し」⁷⁸と。又た云わく、「一切法は色、乃至、意法に趣く。是の趣は過ぎず。色すら尚お不可得なり。云何んが当に趣・非趣有るべけんや。是の如く一切法を遍歴す」⁷⁹と。類して知る可きなり。

5. 觀心に約す

第五に觀心に約して經を明かすとは、即ち四意と為す。一に無翻に類して、觀心に約して經を明かす。二に有翻に類して、觀心に約して經を明かす。三に有翻・無翻を和通するに類して、觀心に約して經を明かす。四に法に歴るに類して、觀心に約して經を明かす。

5.1. 無翻に類して、觀心に約して經を明かす

一に無翻に類して、觀心に約して經を明かすとは、何ぞ但だ修多羅は無翻

76 此の『經』に云わく、「食に於いて等しければ、諸法も亦た等し。諸法等しければ、食に於いても亦た等し」『維摩經』卷上、弟子品、「唯、須菩提、若能於食等者、諸法亦等。諸法等者、於食亦等」(同前, p. 540, b21-22)を参照。

77 「能く一食を以て一切に施す」『維摩經』卷上、弟子品、「以一食施一切、供養諸仏、及衆賢聖、然後可食」(同前, p. 540, b7-8)を参照。

78 『大品經』に云わく、「諸法等しきが故に、般若波羅密も等し」『大品般若經』卷第二十七、法尚品、「諸法等故、当知般若波羅密亦等。諸法離故、当知般若波羅密亦離」(T08, no. 223, p. 423, a28-b1)を参照。

79 又た云わく、「一切法は色、乃至、意法に趣く。是の趣は過ぎず。色すら尚お不可得なり。云何んが当に趣・非趣有るべけんや。是の如く一切法を遍歴す」『大品般若經』卷第十五、知識品、「須菩提、一切法趣色、是趣不過。何以故。色畢竟不可得、云何当有趣不趣。須菩提、一切法趣受想行識、是趣不過。何以故。受想行識畢竟不可得、云何当有趣不趣。十二入、十八界亦如是」(同前, p. 333, b12-16)を参照。

にして、名は五義を含むや。衆生の心に一切法を含む。亦た的まさしく銘しる⁸⁰す可からず。所以は何ん。若し一切の心数を離れば、何を詔づけて心と為すや。

今、観心に五義を含むと言うは、一に心に法本の義を含む。『提謂經』に云わく、「心は是れ万行の本、衆靈の源なり。出入に乱無く、往来にた聞て無し。一身を統御して、以て道根を立つ」⁸¹と。此れは是れ言説の本にして、即ち教の本なり。万行の本は、即ち行の本なり。以て道の根を立つるは、即ち理の本なり。

二に観心に約して微発の義を含むとは、細微の法は、刹那に若くは莫し。此の相續に因りて、一切法を成ず。若し此の心を観じて、諸の功德智慧を発するも、亦た微従り著に至るなり。

三に観心に約して涌泉の義を含むを明かすとは、観心に因りて功德智慧を発すること、涌泉尽くること無きが如きなり。故に『仁王經』に云わく、「能く心源を観じて、無量の報を得」⁸²と。

四に観心に約して結鬘の義を含むとは、心王は一切の心数の法を穿つこと、縷、華を穿ち鬘を成じ、零漏すること無きが如きなり。観心もて一切法を穿つこと、亦復た是の如し。若し定慧を発せば、還た心を嚴飾するなり。

五に観心に約して繩墨の義を含むを明かすとは、観心は愛・見の邪曲を裁ち、八直の正道を成ずるなり。

80 銘 底本の「詔」を、『再校維摩經玄義』によって「銘」に改める。

81 『提謂經』に云わく、「心は是れ万行の本、衆靈の源なり。出入に乱無く、往来にた聞て無し。一身を統御して、以て道根を立つ」『提謂波利經』は敦煌写本(P. 3732)に断片が残る。牧田諦亮『疑經研究』(京都大学人文科学研究所、1976年、188頁)、「長者白仏言、何謂為神。仏言、神者内為心、神外為朱雀。太一之元、虚无之根、出入无孔、往来无聞。泥洹君開虚无門。統御一心、立道之根」を参照。

82 『仁王經』に云わく、「能く心源を観じて、無量の報を得」『仁王般若波羅蜜經』卷上、菩薩教化品、「空慧寂然無縁観 還観心空無量報」(同前, no. 245, p. 827, c11)を参照。

5.2. 有翻に類して、観心に約して経を明かす

二に有翻に類して、観心を明かすとは、若し法を^{もつ}将て心に約せば、則ち銘⁸³す可きなり。還た須らく前の五種、修多羅を翻ずるに對す。

一に観心は即ち是れ法本なりと明かすとは、已に前に引く『提謂經』の明かす所の如きなり。

二に観心は即ち是れ契なるに約すとは、観心は理に會す。即ち是れ契なり。

三に観心は即ち綻の義なるに約することを明かすとは、観心は能く一切の道法を成ずること、綻の衣を成ずるが如し。

四に観心は即ち是れ善語教なりと約することを明かすとは、『經』に、「覺観は是れ言語の法なり」⁸⁴と。観心は既に是れ理に順ずるの覺観にして、即ち是れ善語なり。能く観ずる所の煩惱を転じて、即ち名づけて教と為す。故に此の『經』に云わく、「弟子衆の塵勞は、意の転ずる所に隨うなり」⁸⁵と。

五に観心は即ち是れ経なりと明かすとは、経は観心に由りて、聖を成ずることを得るなり。故に『般舟經』に云わく、「諸仏は心従り解脱を得。心とは、無垢にして清浄と名づく。五道は鮮潔にして色を受けず。此れを解する者有らば、大道を成ず」⁸⁶と。

83 銘 底本の「詔」を、『再校維摩經玄義』によって「銘」に改める。

84 『經』に、「覺観は是れ言語の法なり」『大方等大集經』卷第十二、無言菩薩品、「一切衆生性無言故、以覺観故而有声出。若無覺観、云何有声。云何可説。云何有字。大徳、夫覺観中無字無声、離於覺観、亦無声字、覺観之体、即非覺観」(T13, no. 397, p. 76, c4-8)を参照。

85 此の『經』に云わく、「弟子衆の塵勞は、意の転ずる所に隨うなり」『維摩經』卷中、仏道品、「弟子衆塵勞 随意之所転 道品善知識 由是成正覺」(T14, no. 475, p. 549, c6-7)を参照。

86 『般舟經』に云わく、「諸仏は心従り解脱を得。心とは、無垢にして清浄と名づく。五道は鮮潔にして色を受けず。此れを解する者有らば、大道を成ず」『般舟三昧經』卷中、無著品、「諸仏従心得道 心者清浄明無垢 五道鮮潔不受色 有解是者成大道」(T13, no. 418, p. 909, a7-8)を参照。

5.3. 有翻・無翻を和通するに類して、観心に約して経を明かす

三に有翻・無翻を和通するに類して、観心に約することを明かすとは、此の如く心を観ずるの時、即ち此の心は名目す可きに非ず、名目す可からざるに非ず、亦た名目す可からず、亦た名目す可しと知る。類して有翻・無翻に似たり。若し能く通達して滞礙たいげ無くば、則ち観心に於いて、一切法を破す。執著する所無く、諸の戲論を離れ、無礙自在なり。

5.4. 法に歴るに類して、観心に約して経を明かす

四に観心に約して法に歴て悉ごとく是れ経なるを明かすとは、一切万法は、皆な心従り起く。若し心は即ち是れ経ならば、即ち諸法は皆な是れ経なり^{549b}。故に『華嚴経』に云わく、「如来の心を知らんと欲せば、但だ衆生の心を観ぜよ。譬えば一微塵の中に三千大千世界の経卷有るが如し」⁸⁷と。人の知る者無し。人有りて此の微塵を破せば、即ち三千世界の経卷を見る。若し衆生の一念無明の心を破せば、則ち一切諸仏の説く所の経は皆な顕現するなり。若し行人は能く観心を用て心経を尋読せば、即ち仏性を見て、大涅槃に住するなり。一切の頓・漸・秘密・不定の諸経に於いて、皆な明了なることを得。所以は何ん。心の生滅を観ずれば、一切の三蔵教は横豎に分明なるを見る。心の不生滅を観ずれば、一切の通教は横豎に分明なるを見る。心の仮名を観ずれば、一切の別教は横豎に分明なるを見る。心の中道を観ずれば、一切の円教は横豎に分明なるを見る。四教の諸経に対すること、前に分別するが如し〔一に不可思議解脱と名づく〕。

87 『華嚴経』に云わく、「如来の心を知らんと欲せば、但だ衆生の心を観ぜよ。譬えば一微塵の中に三千大千世界の経卷有るが如し」『六十卷華嚴経』卷第三十五、宝王如来性起品、「欲知如来心 応解最勝智 如来智无量 最勝心亦然 十方諸世界 一切衆生類 皆悉依虚空 虚空无所依」(T09, no. 278, p. 624, a27-b1)、同、「譬如微塵内 有一大経卷 三千世界等 無益衆生類 爾時有一人 出興於世間 破塵出経卷 饒益一切世」(同前, p. 625, a6-9)を参照。